

からこかぎ

第13号 平成28年3月13日(日)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

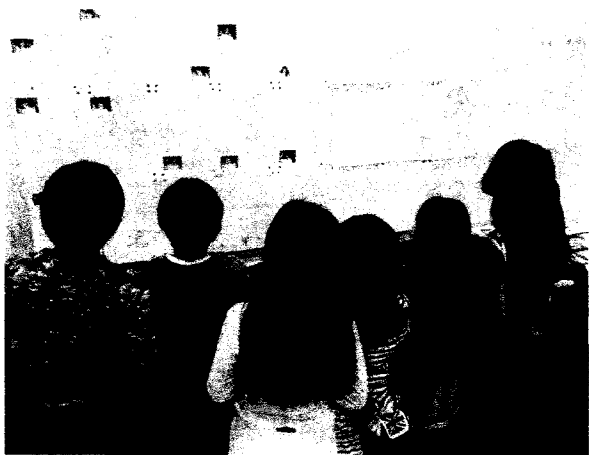
TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

平成27年度 小学校作品展

今西 和代

今年で7回目を迎えた作品展は、2月5日から10日までの5日間で267名(大人165名、子供102名)の方々に見学していただきました。児童が作った勾玉や野焼きした土器などをテーブルに展示し、児童各自が弥生時代について調べた事柄や写真を、新聞形式にまとめて大きなパネルに貼りだしました。

私たちも、今年の学校支援の活動を思い出しながら、テーブルを配置し、3階倉庫からパネルを運んで組み立て、会場設営をしました。そして、支援隊が月2回の活動している『ものづくり教室』で作った道具や作品も展示しました。今年が目玉は、銅戈やガラスの勾玉や青銅器製造実験に使った道具(鋳型や送風管、フイゴ等)です。1mぐらいの大きさのフイゴをみて、『これ何するもの?初めて見るわ。』と興味深く見入る子どももいました。毎年、250名を越えるお客様に見ていただき、ありがたいことと感謝しています。



今回は、弥生文化を総合的に理解することを目的とする「総合学習」と「作品展」の経緯についてお話します。

私は、今から18年程前から田原本町立北小学校に勤務していましたが、同校が唐古・鍵遺跡の中にありますので何とか弥生時代を取り上げて教材化したいと願っていました。そのため、当時、今の中央体育館にあった郷土資料館に見学に行ったり、文化財保存課からパンフレットをいただいたりして学習準備をしていました。その後、他の町の学校へ転勤、3年間後に再度北小学校に配属されました。その時に文化財保存課の藤田先生と『唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会』の協力を得て、総合的な学習の時間に『地域の歴史を探ろう～弥生学～』と題して、遺跡の散策・勾玉作り・土器づくり・大型土器で赤米炊飯・石包丁で穂刈体験・土器野焼きなどの活動をする事ができました。

その後、町の教育委員会からもこのような活動を町の5校の小学校でもやれるようにと応援をいただき、今のかたちとなりました。

また、6年前に、子供たちが取り組んだ作品を展示して発表してはどうかという『唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会』から提案があり、作品展も今年で7回目を迎える事ができました。毎年、250名を越えるお客様が、孫や子供の作品、お友達の作品など楽しそうに見ていただいています。

これからも、子供たちの笑顔を大事にして、総合学習の支援活動を充実させたいと思います。今後とも、皆様のご支援をお願いいたします。

古代ものづくり教室から

—今年の活動を振り返って—

山本 淳史

この一年の「古代ものづくり」活動を振り返ってみますと、会合は28回、参加者延430人でした。その活動範囲は学校支援を含め多岐にわたっています。たとえば対外活動では滋賀県にある下之郷遺跡見学と遺跡ボランティア団体との交流、奈良青年会議所イベント参加など多様でした。またお楽しみ体験として今西会長指導の下、団栗酒や団栗味噌作りにも挑戦しました。しかし、今年が目玉は、古代ものづくりメンバー結束の成果である青銅器およびガラス勾玉制作成功が一番に挙げられます。

昨年11月25日の鑄造体験は、遺跡の一隅で行いました。開始後あいにくの雨模様になりましたが、藤原さんの助け船で簡易テントが張られ続行できました。溶融炉、燃料、フイゴなどの仕様は前回会報を参考にして下さい。



今回の実験では、ガラスは陶芸教室の先生も参加されて坩堝（るつぼ）に入れたガラス粉に釉薬のコバルト、酸化鉄など色素材を混入し色ガラス作りを試みました。結果は思ったほどの鮮やかさはなく酸化鉄は少し黄色み、コバルトは僅かに青色が見える程度でした、ガラスの色付けは今後の課題です。

次にガラス勾玉はガラス粉を入れた鑄型を炉内で熱すると、上部の開放された部分が表面張力で丸みを持ち、下部は鑄型の丸みで、全体にバランスがとれた勾玉が完成しました。勾玉の

孔は竹串にニカワを混ぜた粘土を塗りこの串が焼けてきれいな孔ができました。1時間ほど徐冷して、これで完成です。納得のいく勾玉が出来ました。

次に青銅器ですが、まず坩堝の中に錫・鉛を溶かした湯を作り、十分に加熱したこの湯の中に小分けした銅を入れると、スムーズに青銅の湯が出来ました。この湯をあらかじめ温めていた鑄型に流し込みました。注ぎ込む途中で湯口から噴発が起きましたが、かまわずそのまま全量を注ぎ込んで終了しました。この噴発現象は鑄型の内部で大変なことが起きていたことが原因だと後で分かりました。後日、青銅器を研磨すると内壁破片が嵌入していました。内壁が青銅湯の高温で破壊されていたのです。鑄型の制作に問題ありです。藤田先生からも鑄型の作り方



に工夫がいろいろ指摘があり、真土を含め基礎から出直したいと思います。でも今回曲がりなりにも青銅器の形が鑄あがり、青銅器製造の道筋が見えてきました。

今回の体験から推察すると、同じ高温の技術が要ること、青銅やガラスの原材料を全て国産で賄うことが不可能なことも含め、青銅とガラス製造の技術は一体のものとして半島から取り入れ、製造を続けるために技術者は半島と繋がりを持ち続けていたと私は考えています。当唐古・鍵遺跡にもその痕跡があると信じています。折しも、唐古・鍵ミュージアムではガラスがテーマの春季企画展が4月16日から開催されるとのことで、伊藤先生の講演とともに楽しみです。

遺物紹介 (9) —鶏形土製品—

会報編集グループ

今回は、第1室、「まつりといのり」のコーナーに展示されている鶏形土製品を紹介します。

遺物は、1981年の西地区の第11次調査で出土しました。当時は、奈良県が発掘調査を担当していました。調査地は、店舗（ワークマン）の新築に伴う事前調査で、30×7mの長方形調査地（210㎡）です。

11次調査からは、3面の遺構検出面が確認され、弥生前期～後期までの遺構・遺物のほか古墳の周溝（鳥形埴輪小片出土）も検出されています。前期は、大型土坑20基が検出されました。東南隅の土坑からは、前期土器片に混じり縄文晩期の凸帯文土器片（船橋式土器）が出土しており注目されます。中期は、土坑5基のほか小溝・柱穴（住居跡1棟）、柱穴群が検出され前期から安定した居住域であったことがわかります。後期は土坑3基のみと遺構が余り検出されず、西地区の後期段階の衰退を示しています。



さて、鶏形土製品ですが、調査地北西隅の後期後半の土坑（廃棄ピット）の上層より出土しています。赤く焼かれた地肌を持っており、高温で焼かれたことがよくわかる良品です。下層からは、多量の土器片、サヌカイト剥片のほか炭化米、牙製垂飾品などが出土しています。

唐古・鍵ミュージアムコレクション（写真掲載）によると、その形状は、高さ11.1cm、顔幅4.1cmで、頭部から細い棒状になっており、

胴部に差し込む構造と理解できます。

その表情は、はっきりとした鶏冠をもち、鋭く尖る口嘴に明瞭な目・耳たぶ、さらに肉髯（にくぜん）が付けられ写実性に優れた秀品です。

弥生期の鳥は、「霊鳥信仰」といいたいでしょうか、鳥の霊力が穀霊を運ぶとして集落の農耕祭祀と結びつけられています。鳥形木製品の出土が弥生前期に遡ることから朝鮮半島より稲作技術とともに伝播したと解されています。民族史的にも朝鮮半島、北アジア、東南アジアなどで鳥と農耕の結びつきはよくみられます。

鶏形土製品は、平坦な板で作られ、飛翔を表わした鳥形木製品（鳥竿）と異なり、立体的で「鳥」でなく「ニワトリ」です。その姿勢は、しっかり前を直視しています。鳥といえば、鬼虎川遺跡、瓜生堂遺跡、山賀遺跡、亀井遺跡など河内平野の主要な弥生遺跡から多く出土する「鳥形木製品」に注目が集まりがちですが、本品は、土製品です。しかし、弥生期の鳥形の土製品は出土例がありません。極めて稀少な一品です。ちなみに、弥生期の唐古・鍵遺跡からは、鳥形木製品は出土していません。奈良県でも、古墳期になると、唐古・鍵遺跡（唐古・鍵4号墳）、纏向遺跡、石見遺跡などから鳥形木製品の出土例があります。

鳥形土製品は、古墳時代前期に各地に出現し、形象埴輪の1種として理解されています。その場合は、ニワトリ形のものも多く出土しています。纏向遺跡巻野内坂田地区（昭和59年調査）のB拡張区の落ち込みから大型の鶏の埴輪が出土しています。また、唐古・鍵遺跡10号墳や小阪里中遺跡1号墳からも鶏形埴輪の小破片が出土しています。しかし、本遺物は、時期的にも弥生後期の土坑から出土しています。後期といえは冷涼化が進行する一方、倭国大乱に象徴される社会の混乱期に向かっています。遺物は、その立ち姿より、農耕の祈りというよりも時代の混乱に立ち向かう決意を感じさせます。

第14回 弥生ウォークに参加して

—平群谷の弥生遺跡を訪ねて—

大森 初美

6月の予定が雨天順延となり、12月9日に開催されました。当日は、心配された気温もさほど下がらず紅葉がちらほら見えました。

平群谷という限られた地域（空間）の「弥生集落の推移と維持」の確認が今回のウォークの中心テーマと井上さんから説明がありました。



現地立つと、東斜面が緩く西斜面が急傾斜の地形であることが良くわかりました。最初の遺跡は、「椿井下蔵遺跡」でした。遺跡からは、中期後半の土器、石器が出土しており、大和川を遡り平群谷にいち早く弥生人が到着した平群谷の最も古い遺跡と評価されているとのこと。しかし、谷の北側の三里遺跡や梨本遺跡からは自然流路より弥生前期の土器片とサヌカイト片が出土し、さらに中期前半の大溝が検出されて平群谷北側エリアに早い時期の集落の痕跡が認められ、従来のルートの見直しが必要と説明がありました。私は、弥生時代の始まりを「開拓者」の到来とするよりも「弥生文化」の到達とする考えが裏づけられているような気がしました。

次いで、標高64mの平等寺遺跡の墓域に行きました。説明資料を基に、中期前半の大溝や土石流により流れ落ちた大量の中期・後期の弥生土器が出土した自然流路（河川）を確認しました。上層から中・近世の素掘小溝が30条以



上検出されたとのことで、現地の急斜面の地形を考えると稲作に不向きであったことがわかります。墓域は、多くの土器棺墓とともに中期前半の大型方形周溝墓が検出されていました。私は、集落は矢田丘陵に接近する上の段丘面にあり、当然に縄文時代から続く採取生活が中心であったと考えました。その場合、弥生期の代表的墓制である「方形周溝墓」の早い時期の出現とは矛盾するように思えました。案内の井上さんは、付近にみられる小規模集落のみでは同一の生活条件であり、婚姻を含めた社会関係は維持できないので、遠距離集落との交流が不可欠で、その場合は弥生文化が早期に到達した河内平野生駒西麓地域の集団の交流を想定されていました。最後に、丘陵性集落の廿日山遺跡（最高標高103m）を訪れました。遺跡は、中期後半段階の土器を含んだ堅穴住居群が検出され、外縁付紐式銅鐸（廿日山銅鐸）が出土していました。そこでの説明の中で、地域の農具関連の出土例はなく、廿日山遺跡の中期の石包丁が1点のみとのことでした。そこでも廿日山遺跡の生業は採取生活を中心に行っていたと私は思いました。ところが、一方では農耕祭祀と想定されている、「廿日山銅鐸」が出土しています。この意味をどう理解したらよいのか迷いましたが、石包丁が出土する時期に着目し、中期中葉～後半には交換財としての「イネ」の価値が認識された結果、採取生活から稲作への移行が始まったとし、銅鐸は、その生産地は唐古・鍵遺跡の銅鐸製造の時期より早いことから河内での製作の可能性が高いと考えているとの説明でした。そこでも、遠隔地の集落との交流ということがポイントとなりました。

今回は、丘陵上の小規模遺跡を巡りました。弥生の拠点集落を中心とする見方と異なり、小規模集落を維持するための交流という視点から弥生集落を見ることができ、有意義な一日でした。

平成28年度 春季企画展

「弥生遺産Ⅳ～唐古・鍵遺跡の土製品・ガラス etc.～」

弥生時代の人々は、様々な素材を加工して生活に必要な道具を製作しました。今回は唐古・鍵遺跡出土の土製品、金属製品、玉類、骨角器を展示し、それぞれの素材の特性を活かしてどのような造形物がつくられたかをみていきます。また、本年県の指定文化財となった笹鉾山古墳2号墳出土の埴輪や木製品なども展示します。

会 期	平成28年4月16日(土)～5月22日(日) ※月曜休館	 人形土製品
開 館 時 間	9:00～17:00 (入館は16:30まで)	
会 場	特別展示室 (田原本青垣生涯学習センター2階 会議室)	 笹鉾山2号墳出土品
観 覧 料	「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」会員は常設展・企画展とも無料です。 ※ 必ず受付に会員証をご提示のうえご覧ください。	

平成28年度 春季企画展関連

秋季企画展開催にともない、以下の講演会を開催します。

日 時：平成28年5月7日(土) 14:00～15:30

会 場：視聴覚室 (田原本青垣生涯学習センター1階)

内 容：「弥生時代の青銅溶解技術—出土資料から」風“を探る—
 伊藤 幸司氏 (大阪文化財研究所 保存科学室室長) 定 員：80名
 (事前 申込み不要・当日先着順) 受講料：無料

遺跡紹介（8）—安満遺跡

弥生ウォーク世話人グループ

1 大阪府高槻市東部にある安満（あま）遺跡をご紹介します。遺跡は、唐古・鍵遺跡の第1次調査の9年前の1928年に京都大学農学部付属農場の建設に伴い、多量の弥生土器、石器が出土しました。その土器を分析した小林行雄先生が半島から伝来した弥生文化が北部九州から瀬戸内を經由し畿内へと流入したと指摘された重要な遺跡です。ちなみに、その際出土した弥生土器を「安満B類土器」（畿内第I様式土器に相当）と命名され、小林先生の唐古・鍵遺跡での畿内土器編年へとその成果が生かされました。安満遺跡は、平成5年に国史指定を受け、平成31年に史跡公園が開園する予定となっています。

2 遺跡は、北摂山地の東端の安満山西麓を流れる桧尾川が形成した扇状地上（標高10～11m）にあり、遺跡範囲は、東西1500m、南北500m（70ha）に及ぶ大規模な環濠集落です。遺跡の最大の特徴は、環濠とともに居住域と生産域と墓域といった集落の三大文化要素が検出されている点です。以下、それらを説明します。

（1）居住域

前期に、環濠に囲まれた居住域が遺跡中央部の南よりの微高地に形成されます。遺跡からは、前期の石鏃が四国金山産のサヌカイトが多数を占めていることから瀬戸内との交流が濃厚であったことがわかります。これは、河内平野の初期農耕集落が二上山産でなく金山産のサヌカイトを使用していた例と同じです。環濠は、同時存在ではないのですが、4条の環濠が確認されています。また、集落北側から長原式土器が出土し、朱塗櫛簪等が環濠から出土しており在地の縄文人との交流が裏付けられています。

前期後半、末の二度の洪水は、環濠の埋没など集落の一時的衰退をもたらし中期の前半まで引き続きますが、中期後半には集落規模は拡大

します。しかし、後期前半では遺構遺物が少なくなり、その時期に近畿の代表的高地性集落の「古曾部・芝谷遺跡」が出現します。谷を下ると安満遺跡に至る地理的条件に加え、時期的な整合性もあり、出土土器、石器の類似性を根拠に強いつながりが想定されています。なお、古曾部・芝谷遺跡は、丘陵の尾根を造成し、100棟以上の堅穴住居や幅8mの環濠（V字断面）を形成し、多量の土器、石器、多様な鉄器（剣・斧・鏃・刀子・鉋）、農耕具などが出土する一方、讃岐・吉備・河内・近江からの土器が出土し、積極的な交流が認められます。

（2）生産域

平成26年、遺跡南西部から近畿でも最古級の前期前半の小区画水田が検出されました。幅約20～30cmで、高さ約5cmの畦で区切られ、水田1枚の面積は10～65㎡で、57枚が確認されました。北側の高所から南側の低所へと田越して給水しており、奈良県中西遺跡などの前期水田と同じ方式です。

（3）墓域

前期には、墓域は、居住域の東方300～500mにありましたが、中期後半にはその墓域が放棄され、居住域の東と北西に方形周溝墓群が設けられます。全体で、100基以上の方形周溝墓が確認されています。後期の墓域は不明です。

3 安満遺跡の周辺の代表的集落として東奈良遺跡があります。東奈良遺跡は、青銅器関連遺物から製作工房が想定されています。一方、安満遺跡は、剥片、未製品が多く出土することから玉を含めた石製品の製造拠点として評価されています。黒色粘板岩や閃緑岩などの原材料は、淀川の水運を活用したと思われます。しかし、それは、縄文期以来の石器等を中心とした流通ルートで、弥生後期後半には近畿では鉄・青銅器を中心とした新しい流通ルートが生まれます。流通ルートの変更は、安満遺跡が衰退していく原因のひとつであったと推定されます。

第 15 回弥生ウォークのご案内

—鬼虎川遺跡と周辺集落—

井上 知章

1 はじめに

第 15 回の弥生ウォークは、初めて生駒山を越えて、大阪府の弥生遺跡を歩きます。今回は、生駒山西麓の鬼虎川（きとらがわ）遺跡とその周辺の弥生遺跡を訪ねます。

訪問する鬼虎川遺跡を始め神並遺跡、山畑遺跡からは、旧石器時代のナイフ形石器が出土しています。また、縄文草創期と早期を画する押型文土器がたくさん出土している神並遺跡（標高 30m 中位段丘）からは、国内では数例の縄文早期の土偶が出土しており、訪問予定の東大阪郷土資料館に展示してあります。同土偶は、日本最古（縄文草創期）の滋賀県相谷熊原遺跡の土偶とその形状が類似しています。今回訪問する弥生遺跡には、縄文中期末から後・晩期にかけて多くの活動痕跡が見られます。馬場川遺跡、縄手遺跡、日下遺跡の旧石器、縄文時代の土器、石器や人骨などは、今回訪問する弥生遺跡の出土遺物とともに東大阪郷土資料館で確認します。

2 縄手遺跡

縄文後期の住居址が検出された縄手遺跡は、最初に訪れる遺跡ですが、縄文晩期の土器と弥生前期の土器が出土する一方、弥生中期、後期の土器が出土しています。縄手遺跡の周辺には、東にある上六万寺遺跡、岩滝山遺跡からは弥生後期の遺構が検出されており、西方には北鳥池遺跡からも弥生後期の土器がまとまって出土しています。また、東大阪郷土資料館付近にある山畑遺跡は岩滝山遺跡も含め高地性集落と評価されています。大規模集落の鬼虎川遺跡が衰退する弥生中期後半から後期の地域の動向を考えてみたいと思います。

3 鬼塚遺跡

生駒山地からの小河川は、ほぼ 900m の間隔

をもって網の目状に西下していたと考えられています。地域の縄文、弥生遺跡は、流下する小河川が形成した扇状地形の上に立地しています。鬼塚遺跡でも北と南では小規模の河川が確認され、遺跡は扇状地の扇央部に位置します。遺跡からは、縄文晩期の船橋式土器と弥生前期土器が出土する一方、弥生前期から後期にかけて遺構（住居址、方形周溝墓等）や遺物（土器、石器）が多く見つかり、居住域や墓域の推移を確認します。

4 鬼虎川遺跡

鬼塚遺跡から西北 1km には、水走遺跡、鬼虎川遺跡があり、その東方には西ノ辻遺跡、植附遺跡があります。それぞれの遺跡は、河川が形成した落ち込みにより画されていますが隣接しています。そのなかで、植附遺跡からは、少量の縄文土器と畿内第 I 様式の古・中段階の土器が出土しています。弥生期の開始は、鬼虎川遺跡や西ノ辻遺跡よりも先行していたと考えられています。

水走遺跡や鬼虎川遺跡からは、弥生期初頭の貝塚が検出されています。縄文後・晩期の貝塚は、北東に位置する日下遺跡から検出されていますが、弥生期になると鬼虎川遺跡付近が河内湖の汀部にあったと考えられています。その時期の貝塚からは、農耕具の出土もなく、プラントオパール分析でも稲が確認されていません。従って、弥生期初頭では縄文時代の採取生活が中心であったことがわかります。しかし、鬼虎川遺跡も中期になると、大溝や柱穴、方形周溝墓の遺構とともに大量の土器、石器、石製品が出土し、河内を代表する大規模集落となっていきます。また、中期の溝や貝塚から、青銅器鋳型が出土しています。その内訳は、銅鐸鋳型、銅劍鋳型、銅釧鋳型、石突形青銅器鋳型、不明青銅器鋳型で、いずれも和泉砂岩製です。銅劍は、北部九州を中心に作られている祭祀具ですが、銅劍の形の焦げ跡が残っている銅劍鋳型片

が出土しており、尼崎市田能遺跡に次いで近畿では2例目となるものです。また、鉄鏃、鉄鏝などの鉄製品も出土しています。

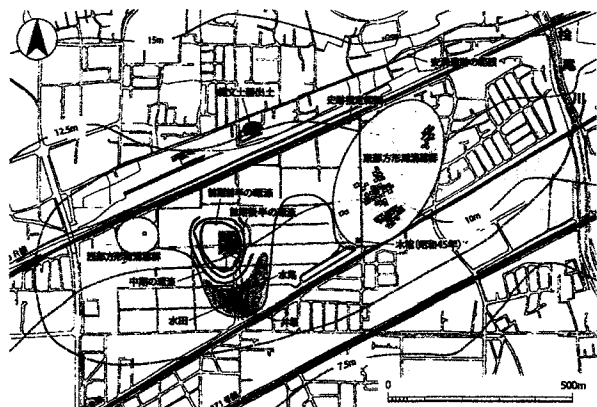
しかし、後期になると遺跡の出土遺物量も減少し、集落は縮小傾向となります。それは、隣接する水走遺跡、西ノ辻遺跡、神並遺跡、植附遺跡も同様です。その原因を大和川が運んでくる土砂の堆積による河内湖の汀辺の移動に求める意見もあります。他地域との河内湖を活用した交流や生業への影響を重視する考えです。

5 最後に

縄文前期から中期にかけて縄文海進によって生駒山の山麓まで海水が入りこみ海湾(河内湾)を形成していましたが、中期以降になると、淀川が運ぶ土砂が強い西風により上町台地に砂州をつくり、湾が潟になりさらに湖に変わっていきます。そして、縄文晩期から弥生前期になると砂州はさらに北に伸び海水の流入をせきとめた結果、淡水化しています。

当然、このような自然環境の変化は、生駒西麓に住んでいる人たちの生活に影響を及ぼしています。今回は、河内西麓の自然環境の変化に対応した遺跡の変遷に着目して、奈良盆地と異なった生駒西麓の弥生遺跡を訪れたいと思います。当日は、昼食を予定している山畑遺跡は、70~100mの標高ですので、四方の景観が見事で、西に大阪平野、南に和泉山脈、西は、大阪湾から淡路島、北は、北摂から六甲山系が一望でき、近畿の弥生集落に思いをはせたいと思います

安満遺跡



お好みの清酒を選ぶ (タイプ)

植田 洋高

前回は、国税庁が告示している「特定名称」による分類でしたが、今回はお酒の製造時期や製造方法の違いによる分類です。商品ラベルに表示されています。

① 新酒

その年に造った酒のこと。フレッシュな味や香りが楽しめます。

② 古酒

前の年度か、さらに以前にできた酒をこう呼びます。熟成香となめらかな味が特長です。

③ 長期貯蔵酒

長期間貯蔵し熟成させた酒。昔は、日本酒は長期の熟成には向かないというのが常識でしたが、製法の進歩なので、熟成でおいしくなるというタイプの清酒で、(〇年貯蔵酒、秘蔵酒、大古酒)などの名前で売られています。

④ 原酒

しぼってから水を加えていない酒。加水していないためアルコール分が高く味が濃い酒です。

⑤ 手造り

甑(こしき)で米を蒸し小蓋(こぶた)または箱で麴をつくり、酒母は生酏・山麴酏または速醸酏を使うなど伝統的な製法で作られた純米酒あるいは本醸造酒です。

⑥ 生酒・生貯蔵酒・生詰め酒

清酒はふつう出荷までに2回加熱殺菌(火入)しますが、この火入を一度もしていない酒を生酒といい、瓶詰め時1回火入をした酒を生貯蔵酒、貯蔵前の火入はするが瓶詰め時にしない酒を生詰め酒と呼んで区別しています。一般に熱をかけていない分フレッシュな香味の酒です。冷やして飲むのが最適です。(この項つづく)

(編集委員)

井上知章	植田洋高	大森初美
谷口敏子	花坂志郎	福島道昭